

[古代編]

旧石器時代／縄文時代／弥生時代／古墳時代
飛鳥・奈良時代／平安時代

古代編

加賀市には、縄文、弥生、古墳時代を中心とした埋蔵文化財が、これまでにおよそ 850ヶ所余り確認されており、当市は、県内有数の遺跡の密集地となっています。古代遺跡が多いということは、この地域が、水に恵まれた自然豊かなところであり、とても住みよい土地であったともいえます。



柴山湯から望む白山連峰

市内の 850 余りの遺跡の中には、国の史跡に指定されている勅使町の法皇山横穴群や二子塚町の狐山古墳をはじめとした、全国的にも有名な遺跡があります。

その他の遺跡でも、1 万年以上前の旧石器時代から現代まで、途切れることなく各時代の痕跡が加賀市内で確認できます。市町村単位で各時代の痕跡をすべて確認できる地域は全国的にも少なく、こうした多種多様な遺跡は加賀市が全国に誇れる歴史遺産といえます。また、これらの遺跡

は、先人たちの知恵や技術の変遷を知る上で欠くことのできない財産であり、教育や観光にも活用できる貴重な資産でもあります。

それでは、このあとは、旧石器、縄文、弥生、古墳の各時代を代表する市内の遺跡を順に見ていきましょう。

旧石器時代

私たちのふるさと加賀市における最も古い人類の痕跡は、宮地町にある琵琶ヶ池の近くで見つかった宮地向山遺跡です。この遺跡は、旧石器時代（今からおよそ 1 万 3 千年以上も前）のものですが、ここからは玉髓や珪質岩などのきわめて硬い石材で作られた石刃や搔器などが見つかっています。また、橋立町大野山で発見された斧形石器と槍先形尖頭器は、旧石器時代の終わり頃か縄文時代始め頃の遺物と推定されています。

橋立丘陵と呼ばれる加賀市北部の丘陵地には、石川県内でも最古級の遺跡が続けて発見されており、さらに貴重な遺跡が発見される可能性を秘めています。



琵琶ヶ池（宮地町）

縄文時代

今から約1万2千年前から約2千4百年前を「縄文時代」と呼んでいます。市内の縄文時代遺跡の中で特に代表的なものとしては、「橋立大野山遺跡」^{はしたてのおのやま}「柴山水底貝塚」^{しばやますいでいかいづか}「柴山貝塚」^{しばやまかいづか}「横北遺跡」^{よこぎた}「藤の木遺跡」などをあげることができます。

縄文時代早期（今からおよそ9千年前）の橋立大野山遺跡からは、県内最古の土器が出土しています。この土器は^{せんてい}尖底^{だえんおしがた}楕円^{もんどき}押型^{とが}文土器^{ほうだん}と呼ばれ、底部が尖った砲弾のような形をしています。

昭和39年、柴山潟干拓工事の際に湖底約6メートルのところで柴山水底貝塚が発見されました。ここからは無数の貝類や土器片約200点のほか、県内最古の^{じんこつ}人骨^{きたしらかわしき}などが出土しました。土器は関西の影響を受けた北白川式土器です。

それまでの古い段階では、橋立丘陵やその近辺でしか遺跡は発見されていませんが、縄文時代前期になると、橋立丘陵の南側にも遺跡が広がっています。現在、加賀市津波倉町の加賀自動車学校があるあたりにあった津波倉縄文遺跡からは、縄文時代前期の土器や石器が出土しています。

一方、柴山町の北側、標高30メートルの台地でも縄文時代中期の柴山貝塚が発見されました。ここからは、^{さんかくとうけい}三角壩形^{どせいひん}土製品をはじめ、8戸におよぶ住居跡が発見され、そのうち4戸には^{いしがこ}石囲い^{ろあと}の炉跡も確認されました。

大聖寺川右岸の辺りで発見された藤の木遺跡は、県内でも最多の縄文時代中期の土器が発見されています。出土した土器は北陸特有の古府式土器や上山田式土器・大杉谷式



三角壩形土製品（柴山貝塚）

土器のほか、東海・近畿系土器や、関東系土器です。石器では中京系の石斧や、長野県と群馬県の境にある和田峠産の^{こくようせき}黒曜石^{せきふ}で作られた刃物^{せってん}などがあり、この地域が縄文時代においても東西文化交流の接点であったことを示しているのです。きれいな石でつくられた装身具なども多数出土しました。

動橋川の中流域にあたる東谷口地区の水田の中から数多くの石器や土器が発見されました。これが縄文時代後期の^{よこぎた}横北遺跡^{いづはし}です。出土遺物の中では、特に県内でも珍しい、

^{ひしがた}菱型^{ちゅうこう}をした注口土器^{じゅじゅつ}や呪術用具^{いぎよう}とも考えられている異形土製品などが出土しています。



尖底楕円押型文土器の破片
（橋立大野山遺跡）

弥生時代

日本では、今からおよそ 2,500 年前にはじめて稲作がおこなわれるようになりました。弥生時代のはじまりです。米づくりが行なわれるようになって食糧の安定供給がはかれるようになりました。当地域にも約 2,300 年前の弥生時代前期末には稲作が行なわれたことが柴山出村遺跡や猫橋遺跡で確認されました。

柴山出村遺跡は弥生時代前期末の遺跡で、北陸では最も古い^{もみ}籾や県内最古の弥生土器が発見されました。この柴山出村式土器は、東北地方の影響が強く、縄文時代晩期の様式を残した土器でした。また、隣接して柴山水底弥生遺跡も発見されたことから、この周辺では、柴山潟沿岸の湿地をそのまま利用した原始的な稲作が行なわれていたと考えられています。

その他、上河崎町地内でも弥生時代中期の^{こまつしき}小松式土器を出土した遺跡が発見され、大聖寺川流域でも比較的早い段階で稲作が行われていたことがわかってきました。

一方、猫橋遺跡は、市内合河町の八日市川にかかる猫橋付近を中心とした広い地域で発見された弥生時代後期の遺跡で「北陸の^{とろいせき}登呂遺跡」とも称される有名な遺跡です。この付近では、田んぼを掘ると水が湧き出るほどの湿地帯で、このような環境が木製品などを「水づけ」のまま永く保存するなどの好条件をうみ、1,800 年前のしゃもじ、くわ、はしごなど、貴重な木製品が、ほぼそのままの形で発見されました。また、稲づくりを示す炭化した米粒や大きな柱を使ったと考えられる倉庫跡や平地における住居跡、さらには^{ほうけいしゅうこうば}方形周溝墓も確認され、こうした数々の遺構や出土物から、この時代、当地には、すでに村を統率する首長が存在していたと思われます。また、この遺跡から出土した土器の形から、山陰文化圏との結びつきが極めて強いことも分かりました。



猫橋遺跡出土木製品（加賀市教育委員会所蔵）



猫橋遺跡が発見された八日市川周辺（合河町）



柴山出村式土器

この時代の稲作は、まず泥湿地などの水田に利用しやすい土地で耕作を開始したことから始まりました。やがて灌漑技術と土木技術の向上により、河川の水を取り込むことができるようになりました。その結果、次第に河川の周辺や山間部にまで耕地が拡大し、生産力が飛躍的に向上していきました。そうした河川を制御することが可能となった地域の指導者が、やがて強大な権力をもつ

た支配者に成長したと考えられます。

こふん 古墳時代



鋸齒文縁方格規矩四神鏡
(分校前山1号墳)

この古墳群は、分校前山支群、分校血墓山支群などに分かれています。特に分校前山支群には首長墓と推定される前方後円墳が4基確認されており、そのうちの1号墳が発掘され、棺から中国製の銅鏡で、大和朝廷が江沼の王に与えたものではないかとされる「鋸齒文縁方格規矩四神鏡」と称する当地方では最も古い鏡が発見されています。動橋川の水利権を掌握し、大和王権にも近い豪族の墳墓群と考えられます。

南郷町から吸坂町、上河崎町にかけての丘陵地には、およそ85基もの古墳が密集しており、黒瀬・南郷古墳群と呼ばれています。このうち、吸坂丸山支群の5号墳からは、鉄製冑をはじめ、鶏形土製品や金製の耳環など、貴重な副葬品が出土しています。この古墳群には全長60mの市内最大の前方後方墳である吸坂A3号墳や、同じく全長70mを超す市内最大の前方後円墳である吸坂イカリ山13号墳など、大聖寺川水系を支配し、江沼郡全体の首長であったと考えられる豪族の墳墓が築かれています。

市内片山津町の西側の台地では、昭和34年、35年の発掘調査により、4世紀から5世紀前半にかけての玉造職人集団が住んでいたとされる片山津玉造遺跡が発見されました。

こうした玉造遺跡は全国でもきわめて珍しい遺跡です。ここでは、33基の住居と工房を兼ねた竪穴式住居跡が発見され、首飾りなどの装飾品に使う管玉や勾玉などの玉類を製造していたと考えられています。ここで使用されていた原石の多くは緑色凝灰岩質の頁岩で、これらは動橋川の上流で採取したものと考えられています。この遺跡で作られた玉類は大和王権に送られ、さらに全国の有力豪族に配分されていました。

3世紀後半から7世紀にかけての古墳時代、当地方でも多くの古墳が作られています。古墳は、力のあった豪族やその一族の墓で、加賀市では、特に分校町の国道8号線付近や吸坂町から黒瀬町に至る、平地を見下ろせる丘陵地などで数多く確認されています。また、片山津玉造遺跡や国指定史跡である法皇山横穴群や狐山古墳などは、全国的によく知られた古墳時代を代表する遺跡です。

分校町から松山町にかけての丘陵地には70基余りの古墳が密集しており、全体を分校松山古墳群と呼んでいます。



鶏形土製品(吸坂丸山古墳)
(加賀市教育委員会所蔵)

一方、昭和7年に、^{ふたごづか}二子塚町地内で、動橋川の堤防工事のために必要とする土取りをしていたところ、箱型の石棺^{せっかん}が発見されました。調査の結果、5世紀中頃の前方後円墳だと分かりました。これが、現在、国指定史跡となっている^{きつねやま}狐山古墳です。全長は56mあり、石棺の中からは、成人男子^{どうきょう}の骨のほかに銅鏡「^{がもんたいしんじゅうきょう}画文帯神獸鏡」や銀製^{ぎんせい}帯金具、刀、短甲^{たんこう}の他、全国的にも4例しか確認されていない、^{けいこう}桂甲と



狐山古墳（加賀市二子塚町）

いう小さな鉄板をつづり合わせた甲冑^{かっちゅう}などが発見されました。これらの副葬品^{ふくそうひん}から畿内^{きない}勢力との強い結びつきがうかがえ、この地域の統治に成功した^{えぬのおみ}江沼臣の一族に関する古墳ではないかと考えられています。なお、この狐山古墳のすぐ近くから、盾を持った人物^{じんぶつ}埴輪も発見され、北陸地方では^{きわ}極めて珍しいものとされています。これらの出土品は、現在、東京国立博物館に保管され、一部が現地の収蔵庫に残されています。

富塚町には、^{とみつか}富塚丸山古墳と呼ぶ大きな古墳の一部が残されています。狐山古墳に続く豪族^{ふんぼ}の墳墓と推定され、狐山古墳よりはるかに大きく、直径70m近くの大きさがあり、江戸時代に甲冑^{かっちゅう}や刀剣・勾玉などの副葬品が出土したと伝えられています。前方後円墳であった可能性もあり、もしそうであったとすれば、全長は120m以上の大きさとなり、手取川以南のこの時期では最大の古墳であったといえます。富塚に眠る王は、南加賀全体に^{くんにん}君臨した大きな力を持つ権力者だった可能性があります。

また、勅使町では、大正11年に考古学者の上田三平により、6世紀中頃から7世紀末にかけての^{ほうおうざんよこあなぐん}法皇山横穴群が確認され、昭和4年には国の指定史跡となりました。法皇山の麓^{ふもと}や中腹には、現在までに80基あまりの横穴が確認されています。古くは、原始人が暮らした洞窟^{どうくつ}だとか、宝物の隠し場所などと言われていましたが、調査の結果、古代人を埋葬した横穴墓であることが分かりました。これらの横穴の数は、詳しく調べれば、恐らく200基以上はあるだろうと考えられており、日本海側では最大級の横穴群として知られています。この横穴に葬られた人々は、動橋川中流域に住んだ当地域の有力な一族の墓地と考えられます。

同じような横穴群は、法皇山に近い宇谷丸山にもあり、ともにこの地域に形成された^{ぎょうかいがん}凝灰岩を掘って横穴を築いています。

集落跡では、弥生時代後期から古墳時代後期の^{おおすがなみ}大菅波A遺跡で、大量の土器が出土しています。この時代の遺跡の一か所からの出土量では県内最多となっており、相当大きな集落があったと^{すいてい}推定されています。出土した土器の中には現在の陶器の原型となる県内



法皇山横穴群（加賀市勅使町）



大菅波A遺跡出土品
（加賀市教育委員会所蔵）

最古の須恵器すえきも出土していて、大菅波出土の須恵器は大阪府の陶邑窯跡群すえむらかまあとから運ばれたと推定され、関西との強い結びつきが想定されています。

古墳時代には玉造りの他にも、須恵器や鉄・炭なども加賀市内で生産を始めていました。

須恵器は5世紀に朝鮮半島から伝わった焼物で、穴窯を用いて高温で焼きしめた硬い焼物です。市内分校町の分校古窯跡群ぶんぎょう こようせきぐんで、6世紀初めころの県内最古と推定される窯跡が確認されています。以後平安時代末期には陶器の加賀古陶かたに転換し、現在の九谷焼まで断続的に窯業が継承されてきたのです。



分校古窯跡群

鉄生産は橋立丘陵の片野町長者屋敷遺跡ちようじゃ やしきで確認されたものが県内でも最古の製鉄遺跡といわれています。橋立丘陵の山砂やますな ふくに含まれる砂鉄きてつを溶かして鉄を生産していたようで、黒崎町の「クロ」は砂鉄を現した地名で、黒瀬町も同様に製鉄遺跡が発見されています。以後、鎌倉時代ころまで継続的に生産していたようで、橋立丘陵を始めとする各所で製鉄遺跡が数多く発見されています。当時の加賀市は全国的にみても数少ない一大製鉄コンビナートであったといえそうです。

現皇室の直接先祖げんこうしつとされる継体天皇けいたいてんのう（オホドノ王）は越前の豪族でした。『日本書紀』や『上宮記』には、父ヒコウシノ王は近江高嶋の出身。母のフリヒメは越前三国、母方の祖母アナニヒメの出身地が現在の加賀市である江沼と記されていますが、これらの3地域はいずれも古墳時代には全国有数の製鉄産地であったことが分かっています。

応神天皇おうじんてんのうの子孫であったともいわれていますが、畿内に入って即位し大王おおきみとなれた背景には、こうした当時の最先端技術であった鉄生産があったと考えられています。

製鉄技術とそれによって作り出される多量の鉄の保有は、刀剣や甲冑などの武器の他、鋤くわや鋤すきなどの農具も作り出すことができ、新たな耕地拡大など生産力の向上を可能にしました。オホドノ王はこうした最新技術と、経済的優位性を背景として畿内に入り、大王（天皇）になったと考えられます。

炭生産も鉄生産に必要な燃料として、ほぼ同じ時期に生産を開始したと推定されています。鉄生産をした遺跡に近接して数多くの炭窯跡すみがまあとが確認されています。

飛鳥・奈良時代

6世紀中頃に朝鮮半島より仏教が伝来し、畿内では次々と古代寺院が建立されるようになりました。江沼地方においても、有力豪族たちがこれまでの古墳に代って、氏寺を建立するようになったと考えられています。現在、この時代に建てられた寺院として、宮地、弓波、津波倉、保賀、高尾の5ヶ所から瓦や土台石など寺院跡と思われる出土物や遺構が確認されています。特に、宮地町と篠原町との間の水田の中に「じょうじゃのかま」と呼ばれる大きな石があり、宮地廃寺の塔心礎に使われた石とされています。同じく、弓波町の忌浪神社で使われている手水鉢は弓波廃寺の塔心礎に使われた石とされています。



じょうじゃのかま（加賀市宮地町）

大宝律令の制定（701年）により江沼地方は「越前国江沼郡」となりました。その後、弘仁14年（823）に加賀国が越前国より独立し、江沼郡の北半が能美郡として分立しました。新しい江沼郡内には、長江・忌浪・山背・竹原・額田・菅浪・八田・三枝の8郷また



越前国江沼郡山背郷計帳（正倉院文書）

は郡家郷を加えた9郷が置かれました。かつては江沼国の首長で、6世紀後半頃から国造の地位を世襲した江沼氏は、律令体制の中で郡司として地方行政官に位置付けられました。なお、西島遺跡は、建造物の規模や出土品などから、一般住宅とは考え難く、律令制下の郡の中心官庁である郡家もしくは有力豪族などの住居として使われたものではないかと考えられています。

この時代、国家統一の機能を確保し、中央と地方の連絡が円滑になされるために、交通路が整備されました。当地では、古代官道である「北陸道」と、その中継機関として「駅」（うまや）が設置されました。江沼郡域では、越前から加賀に入ると、先ず「朝倉駅」に、その次に「潮津駅」に出て、小松の安宅へと抜けていきました。朝倉駅は現在の橋町にあったと考えられています。

奈良東大寺の正倉院文書のなかに、天平12年（740）の「越前国江沼郡山背郷計帳」の一部が残っています。計帳とは、戸籍と並ぶ律令制の基本帳簿で、人民から税をとるための台帳として作成されました。特に、山背郷計帳は、北陸道に関する唯一の籍帳（戸籍と計帳）であり、江沼臣族の一族を家族単位でリスト化したもので、氏名や家族関係、その人の特徴までも記録されておりとても興味深いものです。

このほか、正倉院文書の中には、税として収める稲や粃の比率などを記載した「越前国

しょうげいちょう や「越前国郡稻帳」なども残されており、これらの文書は、当地域の社会構造を知るうえに貴重な資料となっています。

平安時代

平安時代に入ると仏教がますます盛んになり、古来よりの白山信仰が、仏教思想と結びつきました。当地域では、柏野寺、温泉寺、極楽寺、小野坂寺、大聖寺の五つの寺院が「白山五院」と呼ばれ、白山信仰の拠点地として建立されたことが平安後期の書『白山之記』に記載されています。この5つの寺院のうち、温泉寺は現在の山代温泉薬王院だとされています。また、極楽寺は大聖寺畑町に、大聖寺は現在の錦城山から荻生町にかけての山の上にあった寺院と考えられています。このほか、「白山三箇寺」として那谷寺（小松市那谷町）、温谷寺（加賀市宇谷町）、栄谷寺（加賀市栄谷町）があり、この頃、当地方は白山信仰の中心地となっていたことをうかがい知ることができます。

現在、山代温泉薬王院に安置されている「木造十一面観音像」は、もと大聖寺慈光院の本尊として祀られていましたが、関ヶ原の戦いの折、大聖寺城主山口玄蕃頭が前田利長に攻め滅ぼされた際に、池の中に投げ入れられ難を逃れたと伝えられています。明治維新後、同じ白山五院のひとつであった薬王院に移されたものです。平安時代末期の白山信仰の本地仏として貴重な仏像であり、現在、石川県の有形文化財に指定されています。

また、律令体制下で江沼郡を代表する有名な地方豪族の地位を保っていた江沼氏は、平安時代に入ると、郡司層の中に現れなくなりました。平安前期には京都の下級貴族、中期になると下級役人としてその名が見えることから、江沼氏の本流は平安時代になってから地元を離れて京都に移り、結局は下級役人になってしまったようです。その江沼氏に代わり、後期になって新しく台頭した豪族は、土着した国司の末裔である大江氏でした。このように古代から中世への移行期に、在地における有力土豪として勢力を伸ばしたのは、

大江氏のような外来勢力でした。

寛治4年（1090）に加賀守であった藤原為房が、加賀国府から淡津泊（竹の浦泊あたりか）を中継点として敦賀津へ向かった記録があり（『為房卿記』）、当時の貴族たちが、京と加賀国の往来に船運を利用していたことが分かります。中世後期の江沼郡の流通路は、額田十日市や八日市、七日市などの荘園市場を繋ぐ内陸の横軸と、日本海沿岸の



木造十一面観音像
（山代温泉薬王院）



大聖寺川河口「竹ノ浦」付近

あ たかみなと たけ の うらのとまり たてじく
安宅湊や竹ノ浦泊を繋ぐ河川を通じた縦軸をもっていたといえます。